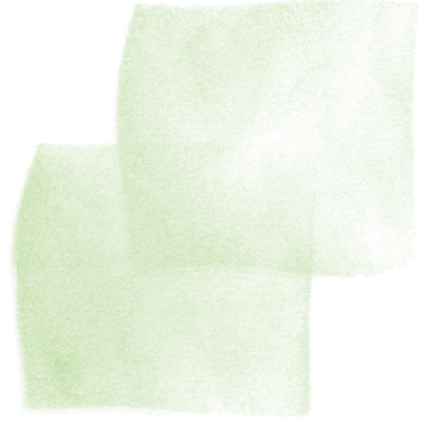
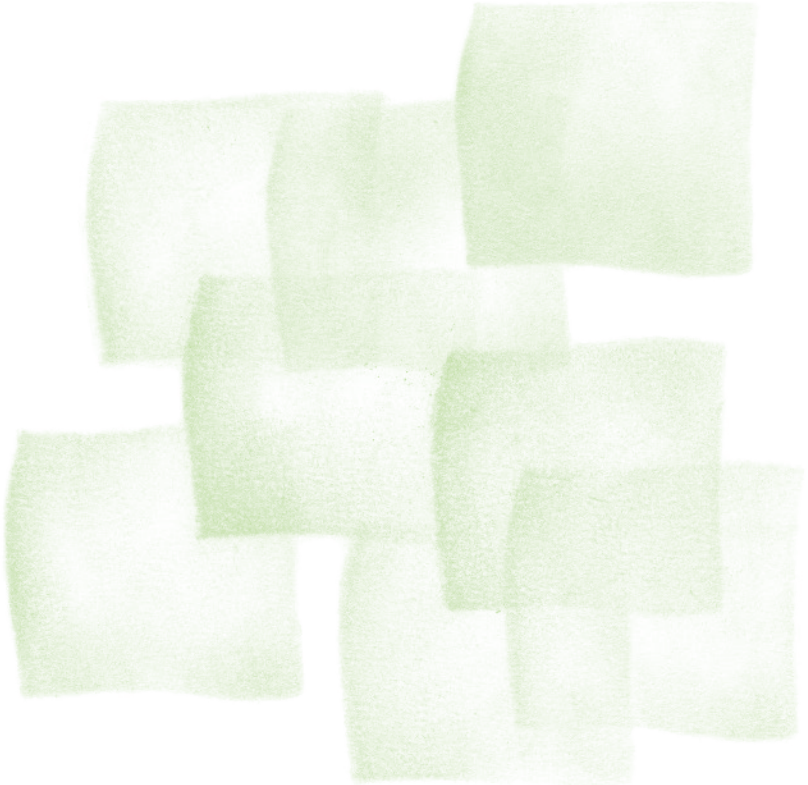


人文研ブックレット 39

歴史の周辺をさまよって

— 人種、ジェンダー、そして人の移動

松本悠子



人文研ブックレット 39

歴史の周辺をさまよって—人種、ジェンダー、そして人の移動

松本悠子

発行 中央大学人文科学研究所

談話会

歴史の周辺をさまよって

— 人種、ジェンダー、そして人の移動

松 本 悠 子

日時 2022年2月26日（土）

場所 多摩キャンパス3号館3351号室

主催 中央大学人文科学研究所

「人文研ブックレット」の発刊にあたり

人文科学研究所が主催した公開講演会、研究会、談話会、シンポジウムのうち、専攻を異にする研究員にとつても興味深く、研究者間の交流に役立つと思われる、例えば学際的領域を扱ったテーマのものを「人文研ブックレット」として発行することにしました。研究チームから提案のあった企画を含め、運営委員会が立案、実施した後、同委員会が審議のうえ決定したものをブックレットの対象としました。

研究所では、共同研究の成果を「紀要」、「叢書」として刊行していますが、人文科学の名で呼ばれる研究分野はあまりにも多岐であり、時に、研究チーム間の関係は疎遠になりがちです。日常の研究領域の枠を越える方へ我々を刺激してくれるこれら口頭による発表や報告も、研究所の重要な研究活動の一つと考えます。催しに出席できなかった研究員に、後日その内容を届けるのが目的ですが、同時に、口頭の発表であるために、おのずと専門語は敷衍され、読者は解説されたメッセージに直接ふれることになりまますから、一研究所の中だけではなく、多くの方々にも親しく読んでいただけるものと信じています。

一九九三年五月二二日

中央大学人文科学研究所

歴史の周辺をさまよって——人種、ジェンダー、そして人の移動

本日はお忙しい中、会場および配信でご参集いただきありがとうございます。これより中央大
学人文科学研究所・研究会チーム「歴史の中の「個」と「共同体」——社会史をこえて」および
「アフロ・ユーラシア大陸における都市と国家の歴史」の共催で、本年度をもちましてご定年退
職を迎えられます文学部西洋史学専攻の松本悠子先生を講師といたしまして、談話会を始めたい
と思います。

松本先生の詳しいご経歴・ご業績は、お手元の資料をご覧ください。コロナ禍のために教室と
オンライン同時という形で、さまざまな対策を施した上での開催ということになりました。ご不
便をおかけしますが、何とぞご海容ください。僭越ですが、西洋史学専攻の杉崎が進行を務めさ
せていただきます。よろしくお願いいたします。

では、本日は「歴史の周辺をさまよって——人種、ジェンダー、そして人の移動」というタイ
トルで、松本先生にご講演いただきます。それではよろしくお願いいたします。どうぞ拍手でお

迎えてください。(拍手)

一九九三年に中央大学文学部にまいりましてから、ほぼ三〇年お世話になりました。数字としては長いのですが、授業や研究など、毎日の試行錯誤の繰り返しに追われてあつという間だったという気がします。今日は、皆様、お忙しいところお時間をいただき、最後のご挨拶の機会を作っていただき、ありがとうございます。

人文研の談話会なので、何か自分の研究のようなものを紹介しなければなりません。まず、どのように私が歴史の周辺を彷徨ってきたか、簡単にご紹介して、今日の本題に入りたいと思います。レジユメについております略歴を作りながら思い返してみると、つくづく私は歴史研究の主流のテーマに取り組むのではなく歴史の周辺のテーマを追い求めてきたと感じます。卒論の題目は、イギリスから見ればはみ出しもののピューリタンのマサチューセツツ植民地の建設です。当時の卒論指導の先生がイギリス史の大家の一人で、大学院に入れば当然イギリスに戻ってくるだろうと思われるのですが、そのままアメリカ合衆国(以下アメリカ)に上陸してしまい、先生のお怒りを買ってしまいました。大学院でも西洋史としては周辺に位置する運命でした。現

在ではそれほどではないと思いますが、半世紀前は、アメリカは、少なくとも大学の組織としては、西洋史の範疇に入っていないも同然だったのです。

大学院以降、アメリカの政治や外交ではなく、移民史、エスニックヒストリー、移民労働者の歴史などに関心を持っていましたので、その後の研究も歴史の周辺をさまようことになりました。ただ、振り返ってみると、私の研究の関心は、二〇世紀後半のアメリカの動きと歴史研究の方法の変化にそれなりに影響されてきたように思います。アメリカの公民権運動の後の多文化主義の動きの中で、人種の問題を避けてアメリカ史を論じることができないと思うようになりました。伝統的な人種差別と抵抗の歴史にはすでに研究の厚みがあります。しかし、人種集団は所与のものではなく、それぞれの時代の政治と社会が作ってきたという視点から人種の歴史を学ぶことは、人種集団をそのように規定した主流社会の歴史を学ぶことになると思ったのです。現在のアメリカのブラックライヴズマターの運動や制度的人種主義の議論を見て、その意をさらに強くしています。さらに、国民国家の相対化の研究が西洋史学でも盛んになるにつれて、アメリカも例外ではなく、国民国家としてどのように成立したのか、国民国家という共同体構築の過程で国内のある人々を「他者化」する、そして「人種化する」必要があったのではないか、ということにも関心を持つようになりました。アメリカ研究ではアメリカという国家が前提ですから発想しにく

かったのですが、西洋史学専攻に所属し、先輩の諸先生がたからいろいろ教えていただき、授業で西洋現代史を講義するために学ばなければならなかった中で、西洋史、あるいは世界史の中でアメリカの歴史を考えることが少しはできたのではないか、と思います。

歴史の周辺という意味ではジェンダー史も伝統的歴史学からすれば周辺に位置すると思います。私自身は、女性だから女性史を研究する、ということには抵抗があつてむしろ若い時には避けていました。というのも、当時の女性史研究には、伝統的な黒人史研究と同じように、女性がどれだけ差別されたか、あるいはその中でも例外的に頑張った女性がいた、あるいは女性運動が女性の権利を獲得してきたか、という叙述が多く、これはこれで重要ですが、ある意味、これまでの歴史研究に付け加える、という意味の研究が多かったです。しかし、一九八〇年代以降でしゅうか、ジェンダー構造やジェンダー規範、男らしさ、女らしさの意味は自然のものではなく、昔から不変のものでもない、それぞれの時代のジェンダー関係を明らかにすることによって、そのようなジェンダー構造を要とする社会や国家のあり方とは何か、を問うことができるというジェンダー史の提言に興味を持ちました。わかりやすくいうと、いつも授業で言っているのですが、職業としての料理人は男性が多いのに、料理ができなければ女性は結婚相手を見つけれない、というような男女双方にある強迫観念のようなものは、どこからきたのか、を考えることが

ジェンダー史研究の第一歩です。このような疑問から、近代社会の性別役割分業や男女の領域論のあり方、国家の組織の基盤と考えられてきた家庭や家族の持つ意味を問い直すことになるわけです。

　　といって、私の研究対象が人種の歴史からジェンダー史に移ったということではなく、むしろ両者の交差性に関心を持っています。そもそも人種は血統の問題だとされていますから、再生産という意味でジェンダーと密接に関わっています。それだけでなく、共に権力関係、すなわち政治学の歴史として捉える必要があるからです。また、最近、インターセクショナルリティ、交差性という言葉が耳にすることがあるかと思えます。これは、本来は、ジェンダーと他の要素、例えば人種に基づく差別が結びつき、交差することで生じる差別を考える、といった意味です。私自身も人種とジェンダーの交差を考えていますが、差別を強調する現代の関心とは少し異なり、両者がどのように相互に関わり、そこに社会や国家のあり方がどのように反映されているのか、を今後も考えてみたいと思っています。

　　そのような考え方の中で、このところ関心を持っているのが、第一次世界大戦の戦場となったフランスにおける人種とジェンダーの問題です。第一次大戦とその戦場としてのフランスに興味

を持ったきっかけは、中大のフランス研究関係の先生方と交流をさせていただいて、アメリカと同様に自由や民主主義といった理念を国是とする国であるのに、その考え方が違うことに気づいたことです。とりわけ人種に関して、理念として人種集団の存在を認めず、センサスにも分類をしない、したがって人種主義についてもアメリカより寛容である、というような分析が、フランス史研究でなされていることに気づき、比較を試みたいと思っただけです。人種認識は、理念だけでは論じられません。ナシヨナリズムや社会規範などの大きな枠組みの構築と日常生活での人々の接触の中から生まれる感情や感覚、相互の理解あるいは誤解の両面が関わるところで作られますが、どこでフランスとアメリカの人種認識は異なる方向に進んだのでしょうか。あるいは本当に異なっていたのでしょうか。確かに、一九世紀まで、ヨーロッパ、特に大陸の地域では、大半の人々にとってアメリカのような日常生活での他の人種との接触はあまりなく、一部の学者や植民地統治に関わる人以外には、万博や書物で与えられたイメージしかなかったでしょう。では、第一次大戦で多様な人種民族が戦場とその後方の社会に入ってきて日常的に接触が起きた時に、ヨーロッパの人々の人種認識はどのようになったのか、このような関心が出発点でした。

第一次世界大戦が「世界」の戦争であることは、いうまでもありません。第一次大戦の多様な

側面は、すでに数え切れないほどある第一次大戦に関する研究で論じられています。しかし、少なくとも日本の第一次大戦に関する研究では、多様な人種民族、とりわけ、これまでヨーロッパの人々と接触のなかった非白人の人々の出会いがもたらされた、という意味での世界の戦争であることは、あまり注目されていないように思います。他方、戦争とジェンダーというと、戦う男らしさ、総力戦での女性の役割、兵士ではないが戦場で活躍した女性などが主な研究テーマですが、先ほど述べましたようなジェンダーと人種の交差性が戦場でどのような意味を持っていたのかという視点も必要ではないかと考えています。

実は、大戦に参加した国々においても、世界の人種民族を動員した戦争であることは、二〇世紀末まである意味忘れ去られていました。二〇世紀末以降の記憶の再生の事例を少し紹介してみましよう。スライド(1)のフレジユスの黒人部隊の像は、実は、一九二四年にランスに作られた像が一九四〇年にナチによって破壊され、そのレプリカが、初代セネガル共和国の大統領レオポルド・センゴールの一九四八年の「フランスのために命を捧げたセネガル狙撃兵にあてて」という詩の一部を刻んだプレートとともに、一九九四年に建てられたものです。コートダジュールの優雅な海岸にあり、しかも私は夏に行ったのでなんとも場違いな感じでしたが、この地があとで述べるように、西アフリカから動員された兵士たちのキャンプ地だったわけです。なぜ、二〇世

紀末になって建てることになったのか、調べ切れていませんが、記憶の再生の一つの例です。イギリスも、二〇〇二年にロンドンのバッキンガム宮殿の近くに、第一次、第二次世界大戦に参加したアジア、アフリカ、カリブ海、オーストラリア、ニュージージーランドなどの兵士たちを記念した「メモリアルゲート」を作りました。スライド(2)のように、柱に参加した地域が刻まれています。また、ユネスコは、二〇〇六年に、第一次大戦における植民地出身の兵士や労働者の歴史の回復を提案しています。二〇一四年、開戦から一世紀を記念するマルセイユの展覧会は、残念ながら見る事ができませんでしたが、「東と西の出会い場所」としての第一次大戦時のマルセイユをメインテーマとしました。また、二〇一五年には、「セネガル狙撃兵」展という小さな展覧会がフランスの各地を巡回展示していました。私は、

スライド (1)

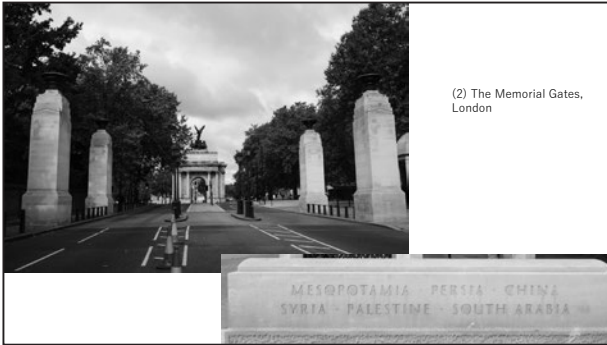


(1)

歴史の周辺をさまよって

フレジユスの丘の上にある、海兵隊の建物で見ましたが、私たちが外誰もいなくて、受付の兵士も手持ち無沙汰の様子で、全国的に記憶の再生があったとはとてもいえないと思います。それでも第一次大戦一〇〇年を機に試みが行われた例といえます。スライド(3)は、この展覧会のメインテーマと考えられるパネルで、このパネル

スライド (2)



(2) The Memorial Gates, London

スライド (3)



「フランス社会における黒人のイメージの変化」

(3) La Caravane de la mémoire, Les Tirailleurs Sénégalais Association Solidarité Internationale

は軍事面ですがこの隣のパネルではフランス社会において、「黒人」のイメージが肯定的なものに変化したことをアピールしています。

では、実際にどのくらいの非白人の人種民族が動員されたのでしょうか。確定的な統計は今のところ見つけられていないので、複数の研究などからの寄せ集めの推定ですが、フランスの場合、北アフリカ、仏領西アフリカ、インドシナなどの植民地から動員された兵士は約六〇万人、アルジェリア、インドシナなどの植民地からの労働者の動員は約一八万人、中国からフランス本土への契約労働者は約三七、〇〇〇人です。イギリスの場合、インドからは、兵士八七、〇〇〇人、労働者四九、〇〇〇人がフランスに上陸し、英領カリブ海域から一〇、〇〇〇人、南アフリカ労働部隊が二〇、〇〇〇人、中国からの契約労働者九五、〇〇〇人がフランスで戦争に参加しました。さらに、アメリカから約二〇万人のアフリカ系アメリカ人兵がフランスに上陸し、イギリス自治植民地の先住民やアメリカの先住民などの動員も行われています。

では、このように世界各地から動員された人々は、戦争にどのように参加したのでしょうか。実は、誰がどこで戦うのか、むしろどこでどのように戦うことが許されるのか、という点は、第一次大戦参加国の戦争の組織化において重要な基準の一つでした。イギリスとアメリカは、ヨーロッパ戦線で非白人が武器を持って白人と戦うことを、ヨーロッパの戦争は「白人の戦争」「文

「明化された戦争」である、などの言葉を使って否定しました。ドイツもまた、非白人がヨーロッパでの戦闘に参加することを、文化文明を守る、という見地から批判しました。たとえば、イギリスは、広く大英帝国から志願兵を募りましたが、カリブ海域からの志願兵に関しては、ヨーロッパ戦線での受け入れに消極的で、最後は労働者として受け入れました。アメリカ軍のアフリカ系アメリカ人部隊は、三つの部隊がフランスに貸し出されて、フランスの国旗のもとで戦闘に参加しましたが、それ以外は、全て非戦闘部隊として処遇されました。アメリカの場合は、国内の人種隔離体制の維持のため、というところが本音でしょう。イギリスやドイツの場合も、植民地兵に武器を持たせると、戦後の植民地経営に支障をきたす懸念があったことが本音だと思いますが、同時に植民地周辺での戦闘ではイギリスもドイツも植民地兵を戦わせていたわけですから、この理由だけでは説明しきれません。レトリックであったとしても、戦争の初期の段階で、ヨーロッパ戦線での戦闘への参加が「白人の名誉」を示すことを各国の政治家も軍部もメディアも繰り返し論じたことは、人々の人種認識を形成する一つの要素となったと考えられます。

一方、フランスは、連合国側で唯一非白人兵をヨーロッパの前線に送り出しました。ただし、「黒人部隊」「インドシナ部隊」というように、一般の白人兵とは異なる組織を作っています。特に、「黒」という言葉に注目してください。先程のフレジユスの像でもそうですが、スライド

(4)の左側の絵葉書でも、「黒人部隊」とされています。もちろん植民地兵、セネガル兵という言葉もあるのですが、「黒」という肌の色を分類の基準とする名称が使われていることは、フランスの人種認識を考える上で、重要だと思われまます。

フランスの黒人部隊、いわゆる「セネガル狙撃兵」と言われる戦闘部隊は、「好戦的な部族」「戦闘に秀でた部族」というステレオタイプのもと、突撃の先兵に使われ、戦死率も高かったと言われています。なお、インドシナ兵は戦闘に向かないという先入観から、前線に送られる時期が遅くなりました。スライド(4)の右側は、その西アフリカ兵のステレオタイプの表象です。一方で、白人の下士官を主人、あるいは父親とし、アフリカ兵は子供のようだとする組織の考え方もまた、その後の人種のステレオタイプの定着に影響していると考えられます。

スライド (4)



スライド(5)は、セネガル兵のフレジユスのキャンプの様子ですが、隔離され、たとえば、この周囲では一九一五年から酒の販売を禁止するなど、厳しい規律が適用されました。このようにある集団をステレオタイプで規定し、軍隊の組織化の基準としたのは、イギリスのインド軍の編成に関しても同様で、軍隊と植民地支配の人種認識の表れだと考えられます。

このような軍隊の人種認識は、有色人種は「肉体労働」に向いている、というステレオタイプも強化しました。スライド(6)は中国人労働者、インドシナ人労働者の生活と働く様子です。このように隔離と管理を厳しくした理由には、女性、酒やギャンブルから遠ざけるだけでなく、労働運動や政治活動を経験させないこともあったと言われます。特に強調したい点は、中国人労働者の扱いです。彼らはあくまで契約労働者であるにもか

スライド(5)



かわらず、イギリスは軍部の指揮下において生活を嚴重に管理しました。フランスでは、中国が植民地の支配下にはないにもかかわらず、ヨーロッパの移民契約労働者とは異なり、植民地労働者を扱う省庁の管理下に中国人労働者を置き、軍隊式の管理を受けさせました。また、中国人労働者に関するフランス軍部と労働者管理の資料で類出しているのが、中国人「原住民」、それに対してヨーロッパ人、というわけ方です。植民地でもないのに「原住民」と分類すること自体、イギリスだけでなくフランスにも人種認識が育っていたことを示しています。一方で、フランス人ではなくヨーロッパ人という呼称は、およそ白人、という意味ではないかと推察でき、分類の仕方に人種認識が垣間見られると思います。また、アフリカ系アメリカ人兵の約八割も同様に労働部隊でしたが、ある資料では、アフリカ系アメリカ人兵が、このような

スライド (6)



区別は奴隷制を想起させる、と抗議していたとありました。

戦闘が激化すると、インドシナ兵やアフリカ系アメリカ人兵はもとより、アフリカ兵や南アフリカの黒人労働者達も、そして契約労働者であった中国人労働者も契約に反して、前線のすぐ近くまで送られました。スライド(7)はセネガル兵が塹壕を掘る訓練をしているところです。シャベルが小さすぎる気がしますが、このような手作業では、人員がどれだけあっても足りないわけで、動員された労働者達も、非戦闘員と言いながら、多くの死傷者を出して戦ったわけです。

このように見てきますと、フランスに上陸しても隔離されているか前線にいるかで、フランス人や他のヨーロッパの人々と接触がなかったかのように見えます。しかし、実際には、いくつかのレベルで人種とジェンダー

スライド (7)



は戦場で交差していました。イギリス軍のインド人部隊はフランス人の家に民泊、中国、インドシナ、北アフリカの労働者たちはフランス人女性とともに軍需工場で働く、西アフリカ兵は冬は耐えられないだろうという理由でこれも先入観が働いているように思いますが、長く南フランスに駐屯していたので、監視があっても地域との接触があったのです。フランスやイギリスの軍部やフランスの地方の行政、植民地省は地域の人々、特に女性との接触到に神経を尖らせていました。たとえば、一九一五年、フランス軍の病院管理担当は、軍関係の病院の看護婦に、「植民地兵と親しくしないように。写真を撮らせるな。」という通達を出しました。スライド（8）の左側のような写真が多く出回っていたのです。フランス軍は西アフリカ兵のためだけの病院を南フランスに作ったのですが、その際看護担当は全て男性にした病院もあり

スライド（8）

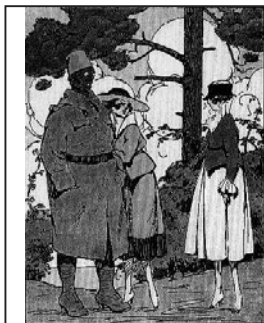


¹
 (8) 戦時代母 La Caravane de la mémoire.
 Les Tirailleurs Sénégalais
 Association Solidarité Internationale
 — Chantel Antier-Renaud, *Les Soldats des colonies* (Éditions Ouest-France,
 2008) 94

ます。また、フランスでは、スライド(8)の右側のように前線の兵士に女性達が「代母」として手紙を書いたり、物資を送る、休暇には実際に会うなどのボランティア活動を行なっていました。「代母」とはいうものの、実際は兵士にとっても女性との接触の機会であり、フランス軍部は、アフリカ系の兵との関わりを控えるよう、警告を発しています。スライド(9)のように、ミドルクラス以上の女性達が黒人に近づくことが盛んに揶揄、批判されます。

軍需工場では、非白人労働者の住居などを有刺鉄線で囲んで、厳しい監視をつけましたが、そもそも工場で完全に女性労働者と接触させないことには無理があり、休日に街に出る機会もありました。植民地出身および中国人労働者の手紙は、郵便検閲の対象だったわけですが、その報告では、売春宿への出入り、フランス人女性との

スライド(9)



Chanel Antier-Renaud, *Les Soldats des colonies* (Editions Ouest-France, 2008) 97

(9)



La Vie Parisienne (Juillet, 1918) Susan R. Grayzel? Tammy M. Proctor, *Gender and the Great War* (Oxford UP, 2017) 69

付き合いやフランス人女性に関する感想、フランス人女性の写真など、が検閲の対象となっていたところからも、日常の接触があつたと考えられます。その結果、たとえば、フランス人女性と歩いていたマダガスカル出身の労働者が、黒い肌を揶揄する言葉を投げかけられたことで暴力沙汰になるなど、多くの暴力事件が起こり、非白人労働者にフランス人家庭を訪問させないなど、自治体と協力する地域もあつたほどです。また、管理売春の方策も取られました。少し話がそれますが、この点について興味深いことは、アメリカ軍が管理売春はフランスの退廃に染まることになること、兵士に出入りを禁じ、フランス当局を当惑させたことです。アメリカのいうところの「道徳」とは？と考えさせられました。

このような異人種間の接触に関する危惧は、フランスだけではありません。アメリカ軍は、フリカ系アメリカ人兵の行動を厳しく監視しており、イギリスも本国の病院でイギリス人看護婦にインド兵と接触させないなどの規制が行われ、インド人部隊の郵便検閲をして、白人女性との関わりに神経をとがらせています。また、イギリス本国で、西インド諸島出身の「黒人兵」や中国人労働者とイギリス人女性の関係が原因となった人種暴動も起きています。

このような異人種間の「親密な関係」の危惧に関しては、フランス人女性に親切にされると植民地兵が「傲慢になる」という言説にもみられる植民地行政の問題があります。実際、マダガス

カル兵の手紙の検閲の報告で、フランスの女性と付き合うことは、植民地での白人男性の振る舞いへの報復だ、という手紙も残されています。しかし、同時に異人種間の関わりがフランス人女性の「墮落」corruptionを招くという言葉がよく使われていることにも注目する必要があります。「国家の純潔」の象徴であるフランス人女性を「守る」という言説と表裏一体の関係にあるわけです。

どのように規制をしても、結婚に至る異人種間の「親密な関係」はおこり、多くの事例が検閲の報告でも紹介されています。雇用者、労働者や兵士の管理担当、自治体はあの手この手を使って思いとどまらせようとし、特に植民地にフランス人女性が妻として行くことを極力阻止しようとしてきました。現地では一夫多妻制や奴隷のような生活が待っている、という言葉で女性の家族を説得しようとする資料が残っていますが、それは、植民地では、白人女性といえども、現地の男性を長とする家族制度の中に組み込まれることを意味します。人種秩序を基盤とする植民地支配において、宗主国の男性と現地の女性の関係は許容しても、その逆は想定していませんでした。結果として、現地の伝統に基づく家族制度やジェンダー規範と人種秩序による支配を同時に維持したことによる矛盾が、戦争による人種とジェンダーの交差で露呈したと言えるでしょう。一方、このような結婚の事例が自治体を悩まし、議論になるほど出ているということは、フランスの一

般の人々に人種認識が浸透していない証左でもありません。規制をしようとした当局は、フランス人女性、特に労働者階級の女性達の「モラル」を批判せざるを得ませんでした。

さらに、異人種間の親密な関係の結果としてのいわゆる混血（この言葉はあまり使いたくないのですが）の誕生は、ヨーロッパ人と他者、植民者と被植民者、白人と非白人の間の政治的文化的境界をどこに置くか、という問題を提示することになります。フランスの場合、植民地における白人男性と現地の女性との間の子供は、想定範囲内でした。しかし、その逆が実例となったとき、数としてはそれほど多くなくても、多方面で議論を呼びました。フランス人の血が入っていることが証明できれば子供がフランス人と認められることには変わりがありません。しかし、一九一九年ぐらいからはフランス法務省も乗り出して、結婚させない、あるいは結婚したとしても植民地出身の男性には親権を取らせない工夫をしようとするなど、実践面で多様な障害を設置しました。その際、当時の優生学の流行も反映して、「混血」は「退化」だという議論が多く飛び交いました。実は、戦争初期、ドイツの侵攻があったときも、「野蛮な人種」であるとされるドイツ人兵士とフランス人女性との子供をどうするか、という議論が激化し、その中には中絶も選択肢として論じられていたのです。いわゆる「混血」の問題は、父親に親権があり、母親は法的に無能力であるとするナポレオン法典のジェンダー規制を脅かしかねない状況になっていたの

です。なお、興味深いのは、アメリカでは同時期、多くの州で異人種間結婚禁止法が施行されていましたが、白人であるかどうかが人種の境界であることが明示され、一滴でも非白人の血が入れば非白人である、したがってアメリカの完全な公民権は認められない、という奴隷制以来の人種認識が堅持されていたことです。ところが、フランスは、半分でもフランスの血が混じればフランス人です。この違いをどのように説明できるか、私の中でもまだ答えは出ていません。

このような異人種間の親密な関係に関する危惧を利用したのが戦時のプロパガンダです。戦時のプロパガンダの有力な手段の一つとして、敵兵が「我々の女性」にとって危険である、というのは常套句で、第二次世界大戦でも、その後の戦争でも使われていました。第一次大戦でも連合国側はドイツ兵が「野蠻」であり、残虐行為をすると非難し、アメリカではドイツ兵をゴリラのように描いたポスターが作られました。フェイクニュースは、今に始まったわけではないのです。それに加えて、第一次大戦では、「黒人兵」が白人女性にとって危険である、という言葉が飛び交いました。興味深いのは、フランス軍の塹壕で作られた新聞に、味方のはずの 아프리카兵と、フランス人女性の関係を揶揄、非難する風刺画やフィクションが多く掲載されていることです。ドイツ軍は、そのような塹壕新聞の内容を知った上で、フランス人女性と「野蠻なアフリカ兵」の関わりに対する前線の兵士の疑心暗鬼を煽るビラを配っているのです。

このような状況に火に油を注いだのが、フランスに上陸したアメリカ軍です。アメリカ軍では、アフリカ系アメリカ人兵が白人女性と話しただけで軍の警察に摘発されるほど人種隔離が明確に維持されていたのですが、アメリカ軍は、それだけでなく、カリブ海域やアフリカの出身者などのいわゆる「黒人」全般に対する人種主義的言説を繰り返し、行動にも出ました。フランス軍や駐屯地の地域に対して、カフェやレストランでの人種隔離を求め、スライド（9）の右のような雑誌の表象に驚愕して、フランス政府に検閲を行うように要求しました。フランス軍に対するアメリカ軍の公式報告では、自らの軍の兵士でありながら、アフリカ系アメリカ人は「怠け者」であり、「白人女性をおそう可能性がある」としました。一九一八年には、いわゆるリナル報告がフランス軍に提出されそうになりました。リナルはフランス側からのアメリカとの連絡将校です。リナル報告はフランス軍がアフリカ系アメリカ人兵に関して気をつけることなどを具体的にまとめたあと、「アメリカ人は黒人と白人女性の人前での親密さに憤慨している」と記しています。実際に、アフリカ兵と白人女性との関わりに激怒したアメリカ人兵やアメリカ軍警察による発砲事件も起きていました。暴行事件が相次いでいる状況のもと、一九一九年には、グアダループ、マルティニーク、レユニオン選出の議員（黒人二人と白人一人）からフランス議会に「人間と市民の権利宣言」が提出され、全員一致で可決されたのです。このような動きを知った

当時のアフリカ系アメリカ人の運動家は、その内容を額面通りに受け取って、フランスは人種主義がない天国だ、という神話を作り上げました。しかし、これまで述べてきたようなフランスによるセネガル狙撃兵の扱いや異人種間の関係の規制と合わせて考えると、このような宣言はどのような意味を持っていたのでしょうか。フランスの国内政治の意図も含めて検討が必要だと思います。

また、休戦後のドイツでは、フランス軍が占領地域にセネガル兵、モロッコ兵、マダガスカル兵などを送り込んだために、いわゆる「黒い恥辱」のキャンペーンが展開されました。戦争中から、スライド(10)にあるように、ドイツはアフリカ兵を野蛮な動物であるかのような描写を行なってプロパガンダを行ってきましたが、そのようなイメージが、占領というパニックの中で実際に接する可能性が出てきた時、人々を恐れさせたといえるで

スライド (10)



しよう。実際の事件はほとんどないにもかかわらず、占領軍そのものというより「黒人兵」が女性にとって危険である、という言説が飛び交いました。あるイギリス人ジャーナリストは「ライラントの黒人化」、「混血は退化の生きた証」と言った言葉で煽り、彼の著作やパンフレットは翻訳されて様々な国に届けられました。イギリスの女性運動もキャンペーンを盛り上げました。アメリカ人女優も、ドイツ本土を回ってアメリカ流人種主義的観点から、アフリカ兵を非難したのです。まさにアメリカからの人種主義の輸出です。この情報戦というか、フェイクニュースの流布は、ドイツのナシヨナリズムとの関係でよく論じられていますが、同時に国境をこえてジェンダーの規制と交差する人種主義の共有が見られたことも重要です。

ここまでの話は、戦場にも生活と人生があり、その中で人種による分断とジェンダーに基づく規制の交差が人の「生」、生きるという意味での生と、セクシュアリティの意味での性を意味しますが、を規定していくという側面です。しかし、戦争は、今もウクライナで行われているように、何よりも破壊と不条理な死を意味します。戦死者をどう処遇するか、という問題に、人種による分断などなかったかのように連合国は、「象徴的な平等主義」で対処しました。フランスは一部兵士の遺体を家族の元に送り届けましたが、大きな共同墓地を北西部の激戦の地に作りまし

た。スライド(11)は、激戦地ヴェルダンの近くのドーモンの共同墓地と納骨堂ですが、一五、〇〇〇名の墓標が外に広がり、納骨堂には名前のわからない三二、〇〇〇体の遺骨が収められています。右下の写真は、訪問したのが秋の霧の日で、なんとなく靈気が感じられて印象深かったので紹介しました。この近くにあるドイツ兵の墓地も、スライド(12)のようにひっそり管理されていますが、平等主義は徹底しているように思います。

アメリカでは、一九二三年にアメリカ戦闘記念碑委員会が組織され、遺体を本国に送らず、ヨーロッパの戦場に広がっている遺骨を八つの墓地にまとめ、アメリカ軍のモニュメントを作ることになりました。基本方針は「象徴的平等主義」で、「個人が国家のために身を捧げる」という理念のもとに、人種による違いもわからないように留意して計画を進めたとのこと。アメリカ軍の厳

スライド (11)



格な隔離政策とアメリカ本国の南部では墓地においてもこの時期には隔離が見られたことを想起すると、この平等主義はどのような発想だったのか、もう少し考えてみる必要があります。スライド(13-1)でわかるように、墓地は一九二〇年代に作られて、その後、第二次世界大戦の戦死者も埋葬されていますが、スラ

スライド (12)



(12)

スライド (13-1)



(13) - 1

歴史の周辺をさまよって

イド（13—2）でわかるように墓地は広大な公園のようであり、また、スライド（13—3）の右側の像が示しているように、子供のような白人の若い男性がアメリカの兵士の象徴として作られていることが印象的でした。スライド（14）の記念碑は、ミューズアルゴンヌの激戦地にアメリカが建てたもので、高さ二〇〇フィートの円

スライド（13—2）



スライド（13—3）



柱の上に自由の像が載っており、近くには、廢墟が残されているものの、なにもない丘の上に建造されています。本題からはそれますが、アメリカはどうしてこのような巨大な墓地やモニュメントをヨーロッパに作り、現在までよく手入れをして管理しているのか、アメリカのフランスあるいはヨーロッパに対する虚勢のようなものを感じました。

イギリスも、コモンウェルス墓地委員会が中心になって、戦後直後に出身地ごとの墓地をフランスに作りました。中国人労働者の墓地、インド兵の墓地など、どの墓地も宗教色を薄めるとともに、各地域の文化的背景を取り入れるなど、宗主国の視点からの東洋のイメージが透けて見えます。スライド(15)は中国人墓地ですが、本当に小さな村の中に、東洋的なシンボルと漢字の墓標が立っています。ここはイギリスの管理下で最大の中国人

スライド (14)



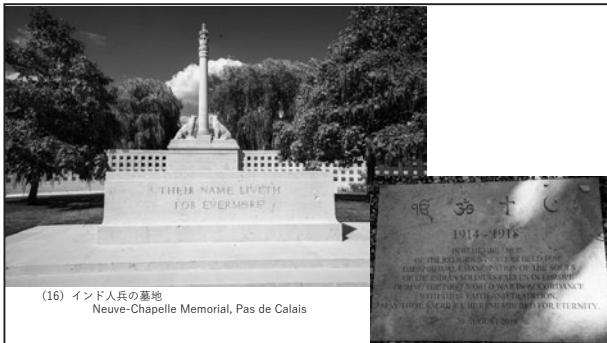
歴史の周辺をさまよって

の労働キャンプがあつたところだ。スライド(16)はインド兵の墓地ですが、インド兵は開戦当初に前線に送られたものの、多大な死傷者を出して一九一五年にはヨーロッパから移動させられています。その激戦地に作られた墓地で、インド古代の神殿の様式を模倣し、アシヨカ大帝の作った円柱を模した彫像にイギリス帝

スライド (15)



スライド (16)



国の王冠、スターオブインディアとハスの花の彫刻が添えられています。インドについての大英帝国の理解の仕方が表象されていると思われ、これも本題とは直接関係ありませんが、インドから見たらどうなのか、興味深い点です。スライド（17―1）は南アフリカ兵及び労働者の墓地とモニュメントです。右側のモニュメントの中の展示は、最近作られたものだと思いますが、「兄弟のように私たちは死んだ」というフレーズは、象徴的です。スライド（17―2）にあるように、この墓地には労働者すなわちアフリカ人の墓も一緒に作られており、この墓地が一九二六年完成であることを考えると、後から付け加えられたのか、あるいは南アフリカにも戦争の死者に対しての象徴としての平等主義が見られたのか、興味深いところですよ。

さらに、究極の平等主義は、スライド（18）にあるよ

スライド（17―1）



歴史の周辺をさまよって

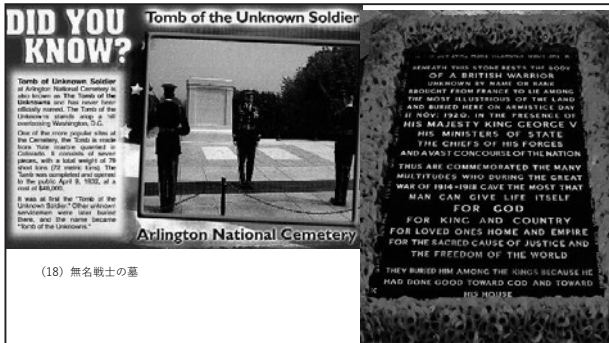
うに無名戦士の墓です。左側がアメリカのアーリントン墓地、右側がイギリスのウエストミンスター寺院ですが、イギリスとフランスが一九二〇年の休戦の日、アメリカがその一年後に無名戦士の埋葬のセレモニーを行なっています。無名戦士の墓については、ナシヨナリズムから見た論考が多くあるので、繰り返しませんが、それぞれの

スライド (17-2)



(17) - 2

スライド (18)



(18) 無名戦士の墓

国のナショナリズムと同時に、国を超えた戦死者への追悼を示すことによる究極の平等主義をもう少し考える必要があるように思います。

なお、このような平等主義の裏には、人種秩序が垣間見えることも言い添えておく必要があります。まず、遺体の回収、墓地の建設の大半は、ヨーロッパやアメリカの白人兵が先に故郷に帰った後、スライド(19)に見られるように中国人労働者やアフリカ人兵士、アメリカの墓地に関してはアフリカ系アメリカ人兵によって行われていました。また、戦争とジェンダーの問題として戦死者と母親の関係を論じる必要がありますが、アメリカでは戦死者の住居には金の星がつけられ、特に母親はゴールドスターマザーとして称えられました。彼女たちを中心に選ばれた戦死者の家族が、一九三〇年代、国費でフランスの墓参のツアーに参加したのですが、総勢

スライド (19)



歴史の周辺をさまよって

一七、〇〇〇人のうち六〇〇〇人のアフリカ系アメリカ人の家族は船も宿泊も隔離されました。生き残ったもの間には平等主義は適用されなかったのです。

このような戦場における人種民族による分断と死者に対する平等主義の狭間で、戦死者の記憶は、人種民族のアイデンティティの拠り所ともなりました。スライド(20)は、パリの中国人コミュニティが、リヨン駅の裏側の建物の壁や、インドシナ系の中国人が多く店を構えている地区の小さな公園に中国人労働者の第一次大戦への貢献を記念したものです。また、スライド(21)は、ニューヨーク市ハーレムの黒人コミュニティの志願兵の部隊がフランス軍と共に戦ったことを示す記念碑を黒人コミュニティや退役軍人達が激戦の地セシヨーにつくったものです。この記念碑を建てるために長い年月、アメリカの軍部や公的機関との争いがあったと言われます。

スライド (20)



本当にも何もない小さな村の外れにあるので、最初分からなくて、アメリカ人墓地の管理をしている退役軍人と思しき人に聞いてみると、自分たちは一切関わりがないからわからないとそっけない答えが返ってきたことが今も記憶に残っています。やはり、象徴としての平等主義は矛盾を抱えているといえましょう。

以上、話が広がりすぎ、まとまりませんでした。第一次世界大戦の戦場における人種認識とジェンダー規制の交差は、戦場だけでなく、それぞれの国や植民地の社会秩序に影響を与えることになるとともに、国を越えた人種主義の形成の契機となったと言えるのではないのでしょうか。また、生きているものにたいする分断や差別と戦死者に対する平等主義をどのようにつないで理解すれば良いのか、それぞれの国のナショナリズムや植民地

スライド (21)



支配を再検討する糸口になるのではないでしょうか。また今回は、全くお話ができませんでしたが、一九二〇年代以降の各植民地での独立運動に第一次大戦の経験がどのような刺激を与えたか、あるいは一九二〇年代のアメリカのアフリカ系アメリカ人の運動とそれに対する締め付けの強化、パンアフリカニズムの動き、パリやニューヨークの「黒人文化」の流行などを理解するためにも、第一次大戦の人種民族の出会い及びジェンダーとの交差は重要な意味を持っていたと思います。

まだ、在外研究や科研費をいただいで集めた資料の多くが手付かずのままなので、退職後も細々となんとかまとめたと思います。ご静聴ありがとうございます。

松本悠子（まつもと ゆうこ）

1952年愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程中退。フルブライト奨学生としてアメリカ合衆国留学（ウイスコンシン州立大学マディソン校）。千葉大学教養部助教授などを経て、中央大学文学部に着任。1995年から2022年3月まで中央大学文学部西洋史学専攻教授。現在名誉教授。専門は、アメリカ史、ジェンダー史、人種の歴史。著書に『創られるアメリカ国民と「他者」』、共編著に『消費とアメリカ社会』、『グローバル化と文化の横断』、『経済と消費社会』『人の移動と文化の交差』、『歴史の中の個と共同体』、論文に「第1次世界大戦下フランスにおける労働・人種・ジェンダー」、"Community Building in Harlem: The New York Age in the 1910s"、「もう一つの第1次世界大戦（2）—戦場における労働と人種」,"Racialization of Japanese Americans and Gender"など。

歴史の周辺をさまよって — 人種、ジェンダー、そして人の移動

人文研ブックレット 39

2022年8月8日 第1刷発行

非売品

著者 松本悠子

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

発行所 中央大学人文科学研究所

所長 深町英夫

☎042-674-3270

